

## 語り継がれる人

江戸時代に度重なる洪水で人々が苦しむ様子を見て、川を治めるために努力した人がいました。人のために尽くした先人たちは今も地元で語り継がれています。徳島県つるぎ町の原喜右衛門と愛媛県今治市の河上安固をご紹介します。

### ■藤森堤を築いた原喜右衛門（徳島県つるぎ町）

江戸時代初期の吉野川は今の流れとは異なり、美馬橋付近から南東方向に向かい、貞光川と合流して北東に流れていたため、貞光付近は度々洪水に見舞われていました。貞光代官の原喜右衛門は貞光村北川原に堤防を築いて、吉野川を美馬橋付近から東流させることにしました。この堤防工事には、貞光村の夫役だけでは足りずに、近隣7か村にも夫役が命じられましたが、その夫役が過酷を極めたため、藩主への直訴が行われました。原喜右衛門は見積違いと不調法の廉により切腹を命じられ、腹心の従者2人も殉職しました。明暦2年（1656）に完成した高さ4.5m、長さ524mの藤森堤は、昭和40年代に新堤ができるまで貞光を吉野川の洪水から守り続けました。原喜右衛門ら3人は、藤森堤を見渡すことができる三王神社に祀られています。〈建設省四国地方建設局徳島工事事務所編「吉野川百年史」1993年、とくしま地域政策研究所編「吉野川事典」1999年、三王堤防の標識〉



### ■蒼社川を改修した河上安固（愛媛県今治市）

江戸時代の中頃まで蒼社川では、洪水により、度々堤防の決壊、田畑の浸水、家屋の流失などの被害に見舞われていました。今治藩は蒼社川を治めることを命じ、河上安固（やすかた）に担当させました。安固は毎日高橋の権現山に登り、蒼社川を見下ろして水の流れを詳しく調べ、蒼社川を治めるために流れを真っ直ぐに付け替えることにしました。蒼社川の川筋を直流にする工事は、安固自らも率先して農民とともにやり、着手から13年後の宝暦13年（1763）に完成しました。蒼社川の川筋では、工事が終わった後も、宗門堀（宗門帳に記された15歳から60歳までの男子全員で行う川ざらえ）を毎年行い、洪水を防ぐ努力が続けられたため、大きな洪水に見舞われることがなくなりました。〈日浅繁一郎編「今治市誌」1943年、今治市教育委員会編「今治の暮らし」2009年など〉

